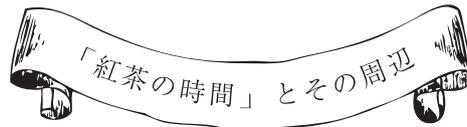


きもちは、 言葉を さがしている



第10話

水野 スウ

わが家で週一のオープンハウス「紅茶の時間」をはじめから、2012年の11月で丸29年。文字通り、誰でもどうぞ、の場所なので、実に実にたくさんの方が通り過ぎていきました。

ふりかえればどの時代にも、印象的な登場人物さんがいて、紅茶という場に、意味深い彩りや、新しい気づきをつけ加えてくれていたなあ、と今あらためて、有り難く、想いします。

人間スクランブル交差点のような、紅茶の時間にやってくる人たちは、割合からすれば、40代から上のおんなの人たちが圧倒的に多いのだけど、そこに時折、若い人がまざることもあって。

今回は、そんな若者たち、SちゃんとTくんの話、少しばかりしようと思います。

Sちゃんのこと

同じ団地の同じ通り、わが家から歩いて20秒のところに住んでるSちゃん。最初は、当時、小学5、6年生だったお姉ちゃんが、近所の同級生たちと紅茶によく遊びに来ていたのです。今から10年余

り前のこと。

そのお姉ちゃんが小学校を卒業する時、「中学に行ったらもうあんまり紅茶にこれないと思うけど、そのかわり、4月からは妹が来るので、スウさん、よろしくお願いします」とあいさつされました。

その申し送り通り、4月になると一人で紅茶にやってくるようになったSちゃん、お姉ちゃんとは6つ違いの妹。これまで保育園に通っていたので、6時に閉まる紅茶には一度も来たことがありませんでした。

両親がとも働きで核家族のおうちの子の多くは、小学校にあがると同時に校区の学童クラブに行くことになったろうから、Sちゃんにとって、来はじめの頃の紅茶は、いわば、週一の私設学童クラブ、のようなものだったかもしれません。

同じ団地に住むNさんは、子どもと遊ぶことにかけて天才みtainなおばちゃん、紅茶に来る子どもたちの、いつも大の人気者。もともと顔見知りのSちゃんも、このおばちゃんがめっちゃ大好

きで、Nさんが仕事の合間をぬって紅茶に顔をだすなり、もううれしくてうれしくて、毎週、遊んで遊んで、と、金魚のふん状態になってそのおばちゃんから離れようとしなない。

根っから子ども好きのNさんなので、子どもと遊ぶのはそりゃ楽しい。だけどその一方で、紅茶は、彼女自身にとっても、他とはひときわ違う意味をもった場所だったようです。

多種多様な人との出逢いがあり、様々な本音の話しに真剣に耳を傾け、そこからまた新しい自分を発見したり、等身大の自分を語ったり、と、いつもは家にこもって仕事している自分への、紅茶は、貴重なごほうび時間。

仕事が忙しくて、紅茶へも限られた時間しかいられない、という事情もあったNさんは、ある日の紅茶で思いきって、そんな自分のきもちをSちゃんに伝えました。

これって、双方にとって、とても大事な通過点だったんだろうな、と思う。Nさんは、相手がまだ小学一年生であっても、きちんと自分のきもちを伝えなきゃいけない、と思ったことで、あらためて紅茶と自分の距離について考え、紅茶が、自分にとって、ただおしゃべりするだけの場ではなくて、こころの栄養をくれる、とくべつな時間と場所であったことを、なお実感したみたいでした。

そしてまたSちゃんも、大好きなおばちゃんのこと、ここは独り占めできないとこなんだと知り、同時に、そのおばちゃんにとっての紅茶がどういう場所なのか、幼いなりに、ほんの少しだけど理解したんじゃないかなかったらうか、と思います。

紅茶な時間の過ごし方

それからSちゃんは、相変わらず毎週の紅茶に、学校から帰るなりやってきましたけど、見てるとほほえましくらい、けなげに、徐々に、おばちゃんのお金魚のふんじゃなくなっていきました。

おばちゃんを含め、おとなの私たちが真剣に話したり、誰かを聴いている時は、その場に居ながら、Sちゃんは静かにひとり遊びをしています。

そして人が少なくなる頃あいをみはからって、「ねー！紙芝居はじまるから、見てみて」と、お気

に入りの紙芝居を木枠の舞台ごと引っ張りだしてきては、残ったおとなたちの前で演じてくれることもありました。

紅茶にくるとたいてい、まずは宿題をすまして、それから、紅茶の本棚にある好きな絵本を読んだり、話しかけてくるおとなからの、「紅茶にはいつも一人で来るの?」「この間もここで会ったね、覚えてる?」といった質問にもハキハキ応えては、しっかりしてるね、とほめられたり。時には同級生たちを何人か連れて来て、紅茶で子どもたちだけで遊ぶこともありました。

小学3,4年生の頃だったか、同じクラスの不登校の子と、ある時期は毎週のように紅茶で遊んでいた。学校に行ってる子と行ってない子が、なんとなく一緒に居られる、紅茶というゆるやかな空間。

なんで学校にこないの?などと、その子に一度も訊かないあたりが、ここに来続けてるSちゃんならではの、紅茶な態度だったなあ、と思います。

こういう場所に不慣れなおとなは、わりとあれこれ尋問するけど、紅茶の仲間とよべる人たちは、あたらしくやって来る誰に対してもむやみやたらと質問しないこと。個人的なことは、その人その人が話したくなかった時、自然と話しだすものなんだ、ということ、Sちゃんはきつとからだ感覚で知っていったのでしょうか。

肩書きや、どこどこの所属、ということがいっさい問われない紅茶の場の空気を、彼女もいつのまに、いっぱい吸い込んでいたのだろうな、と思います。

「こころカード」

紅茶では、その時々顔ぶれに応じて、「ところで、いきなりですが」と私が言いだし、簡単なワークショップのような、ゲームのような、非日常の時間が突然はじまる、ってことが結構あります。

そのワークショップを純粋に楽しみたくてする場合もちろんあるけど、会話の流れが、噂話や、

誰かの個人攻撃に走りそうな気配のする時など、しばしばいくつかのゲームに、場の空気少々入れ替え係をしてもらうのです。

その中でも、とくにSちゃんのお気に入りなのが、「こころカード」ゲーム。

「心」という字がはいっている漢字一文字を、思いつく限り何枚でも、折り紙一枚に一つづつ、書き出していく。「優」「恋」「聴」「志」「思」「芯」「想」「愛」「慎」「憶」「慶」「怖」「葱」「快」「意」「情」、等等。

ほんの数人でしてもすぐ、その場に何十という漢字が並ぶ。その中から、今日の自分のきもちにあった漢字のカードを一つか二つ選んで、なぜそれを選んだのか、短く話す。

たったこれだけのことだけど、意外なほど、自分でも無意識だったその日のきもちにふっと気づいたり、発見したり、そこから会話がふくらんでいったりと、思わぬ場面に展開していくことが何度もありました。

ねっ、スウさん、今日もまた、こころカードしよう、しよう、と自分から言い、これまでに何回もしてきて、たぶんおとなの誰よりもたくさん、心のつく漢字を書き出せるようになったSちゃんが、ある日の「こころカード」で選んだ一枚は、「悲」という字でした。

「あのね、この間、おじいちゃんが死んだんだ。もう年だったんだけどさ、一緒に暮らしてなくてさ、何だかやっぱりさ……。だから、今日はこの字にしてみた」

あ、今日のSちゃんはこのことが言いたかったのか。いつも明るくふるまっているSちゃんにしたなら、いきなり自分から言うには少々戸惑いみたいなもんもあったかな、それでこころカードのちからを借りて、そのきもち、みんなの前でちょっと出したくなったのかもしれないな、って思った。

カードでキーワードを出せた後は、その場にいた数人のおとなたちが、Sちゃんの語るおじいちゃんの話に、ゆっくりと耳を傾けたのでした。

「ん」しりとり

彼女のもう一つのお気に入りゲームは、「ん」しりとり。

ふつうのしりとりなら、「ん」で終わる言葉を出した方が負けになるけど、「ん」しりとりは、「～ん」ではじまって「～ん」で終わる、いわばルールがさかさまのしりとりです。

例えば、新幹線——専門——問診——心音——温暖——だんだん島のみかん——感心——心臓のお医者さん——サンタさん——サンドイッチマン——マンガ大好きどらえもん——問題解決本——ほんまは、あかんねん——ねんころりん——リンカーン、といった具合に続けていく。

このしりとりも、その日その時の顔ぶれで、繰り返し楽しんだゲームだけど、ある日の紅茶で、ちょうど「ん」しりとりしてる最中に、40代くらいの、うつむき加減の、はじめての男の人がやってきました。

一応ルールを説明してから「ん」しりとりを誘ってみたけど、どうやらその気はなさそう。一体何やってるんだ、ここはそもそもどういうところだ、っていう顔で、ブスとしたままそこに居て、紅茶を入れても黙ったまま会釈して、一口すすりただけでした。

Sちゃんやほかの人たちとしりとりを続けながら、私が「もうそろそろネタも切れたね、今日んところはここまでにしようか」と言って、「千円」を区切りに、「ん」しりとりを終わろうとしたその時、これまでひと言も発しなかった、初紅茶の彼が、小声でぼそり、「えんしゅうりつはさんてんいちよん」。

!!「円周率は、3.14」そう言った彼に、うまい! と拍手したら、はじめてその人は顔をあげて、ちょっとだけ笑いました。

翌週の紅茶に、その人がふたたびやって来た時すかさず、Sちゃんが「あ!円周率さんだ!」高らかにうれしそうに、そう呼んだものだから、その瞬間、彼は思わず、自然な笑みを浮かべてしまった。

その日の紅茶がとりわけはやってなかったこと

も幸いしたんでしょう、紅茶を何杯もおかわりしながら、問はず語りに、彼はどろどろにたまっていた胸のうちをいっぱい語ってくれました。

大のおとなだって

時には重た苦しい空気になることもある紅茶のさまざまな場面で、私は何度、Sちゃん存在に助けられたことだろうか、と思う。彼女は、きまって毎水曜日の何時間かを紅茶で過ごし、私たちの会話の中にはめったに入ってこないけど、その分、実にしっかりと私たちの話を聴いていました。

何もなくていい、ただ、そこに居ていい、という紅茶の時間で、等身大の、素のままの、自分をさらけ出すおとなたちが、こんなにもたくさんいることを、Sちゃんは、何度も何度も目のあたりにしたはず。

見た目は立派な大のおとなが、いつも陽気にみえるあのお母さんが、美人のお姉さんが、学校の先生や看護師長さん、社長さん、それにお坊さんだって、時にはおちこんだり、悩んだり、しんどかったりすることがあるんだ。弱音をはいて、弱みを見せて、時には泣くことだってあるんだ。

ふつうの小学生にしたら、日ごろそうそう目にしないだろう場面に、Sちゃんは紅茶で何度も立ち会ったことになります。

Sちゃんに限らないけど、子どもとんやかやおしゃべりしてると、その言葉のはしばしから、家族の風景や親ごさんの価値観、ご夫婦のかたちなど、時にとてもリアルに見えてきます。

「うちのお母さん、体育界系だからさ」とSちゃんが言うように、ガンバルも、根性も、気合いも、きっと嫌いじゃなさそうなお母さん。一時、スポーツクラブをやめたくなったこともあったけど、「言ったって、うちはどうせやめさせてもらえんからね〜」と、紅茶でこぼしたこともあったっけな。

だけどね、そういうきっぱりしたとこがまさにうちのお母さんなんだ、と彼女は十分わかっているんだよね。何より、お母さんを大好きなこと、こっちにだっていっぱい伝わってくるし、だからこそ親のことを、実によく見ているなあ、って思

う。

「お姉ちゃんとあたしと、子ども二人育てるのって、親ってほんとに大変だよなあ」なんて、ちょっとおとなな口調でSちゃんが言う時、その口調の中に、両親への感謝もいっぱい感じられるのです。

子どもの前で、おそらく弱さは見せないタイプの、Sちゃんのお母さん。でもそんなお母さんにだって、つらい時や泣きたい時も、きっとあったろう、あるんだろう。

Sちゃんは紅茶に來続けて、いろんなおとなたちの、等身大の姿も涙もたくさん見てきたことで、同年代の他の子たちよりは、はるかに豊かに、子どもには見せない両親の様々なこころ模様だって、想像することができたのじゃないかなあ、と思います。

中学校へ

小学校を卒業する時、Sちゃんは、私にすばらしい感謝状をくれました。そこに書かれていた私の肩書き(!笑)は、「紅茶の学校 校長先生」でした。

6年間、ほぼ皆勤賞だった彼女にとって、たしかに紅茶はもう一つの学校だったと思います。私の役職名が、校長の他にも、紅茶おかわりいれ係、みんなの話きく係、ゲーム係、といろいろ並んでいて、ああ、よかった、校長さん、って肩書きだけじゃなくって、と、そのあたりがとてもうれしかったです。

中学にいったら、部活もはじまり、お姉ちゃんがそうだったように、めったに紅茶にはこれなくなったSちゃん。それでも、学校が早く終わる水曜日、期末試験にはいった水曜日、台風で学校が臨時休校の水曜日、などにはきまって紅茶にやってきました。

実をいうと、Sちゃんが中学生になる時、失礼ながら、私はちょっと心配もしていた。何をしなくても、ただbeでいることがまったく赦されている紅茶は、たとえていえば、まるで温泉みたいに、

ゆるい場所。だけど、今どきの中学校は、もちろん全然、ゆるくない。

どの子どもも、小学生の時とは比べものにならないくらい、点数や結果といったdoを求められ、それによって評価されるのだろうな。そんな場では、Sちゃんのまっすぐな正義感や率直なものいいが、逆に彼女をつらくさせることもあるんじゃないか、なんて懸念が、なくはなかったのです。

でもどうやら、それはあんまり私が心配しなくてもいいことだったみたい。Sちゃんは、現実の学校と、非日常の、いつときシェルター的な役割を持つ紅茶との違いを、6年間、紅茶に毎週通うことで、自ら充分に、学んでいたようでした。

高校へ、そして

「紅茶ってさあ、家とも学校とも違う場所だよ、そしてなぜか不思議と、思っていることがすつと言葉になっていくところなんだ。学校じゃ、こんなふうには絶対いえないもん」

ある日の紅茶でそう言ってくれたSちゃん。

今もたまに紅茶に顔をだしては、学校でのいやなこと、家では言えないお母さんへのぐちなど、ぼろりと口にするので、また自分のきもちをリセットする、そんな技を彼女はもうすっかり身につけていました。その程よいバランス感覚を見ると、ああ、この子ならどこに行っても生きていけそうだ、って思えてくるのです。

Sちゃんは小学生の時から、大きくなったらマッサージする人になるんだ、いろんな人の肩こり治してあげたいんだ、と言ってました。大工しているお父さんの肩を、もんであげると、きもちいいなあ、上手だねえ、と何度も言われて、やがてそういう夢がふくらんだらしいです。

中学3年生時点で、背丈はもうとうに私を追い越したSちゃん。高校でもまたバレーボール部にはいって、背もさらに伸びた。

夏休みに久しぶりに来た時、高校卒業したら石川を出ちゃうかも知れんけど、結婚して子どもが生まれたら、その子つれて絶対くるからさ、スウさん、それまでずっと紅茶続けててよね、と真顔

で言われました。

ひえ～～、そんなに長く続けられるかどうかかわかんないけど、でもそう思ってもらえるのは、うれしいことだねえ、と返す私。

Sちゃんはこの春、高校3年生になります。マッサージする人、からもう少し具体的に目標が定まってきて、今は作業療法士になるための学校進学を、めざしているところです。

Tくんのこと

およそ20年も前になるでしょうか。「紅茶って、オレみたいなのが、行ってもいいとこながけ？」と富山弁で電話をかけてきた男の子がいます。

オレみたいなの、の中味は、学校に行っていないオレ、という意味だったとわかり、彼にも、紅茶は誰でもどうぞな場所、なんだとわかり、以来、Mくんはわが家の紅茶にやってくるようになりました。一時期は毎週のように、それも富山から一時間半くらいかけて、自転車で。彼はその頃たしか、17.8歳だったと思います。

その2年くらい後だったか、Mくんが実行委員長になって、不登校を語るシンポジウムが富山大学で開かれました。パネラーの全員が不登校を体験している若者で、その一人が、Mくんより少し年下の、石川のTくん。

彼の話をお聴くのは、私にはその日がはじめてだったけど、あ、そういえば、小学校の途中から学校に行っていない、という3兄弟妹が石川にいたんだ。その真ん中がこの彼なんだな、と話を聴いているうちにわかりました。

その後しばらくして、Mくんから電話がかかって。富山の時にパネラーの一人だったTくんが、今度は金沢でシンポジウムを開こうとしている。もしよかったら、その会のうちあわせを、スウさんちでさせてもらえないだろうか。そんな経緯があって、金沢でのシンポジウム実行委員会を何回か、わが家で集まってすることになりました。

「学校って何？」

小学5年生の時から中学と、ずっと不登校だっ

たTくんは、その時、19歳。金沢の通信制高校に通っていて、Tくんの当時のガールフレンドがその高校と同じ場所にある進学校の生徒だったこともあって、彼には、通信制高校ともだちとふつう高校ともだちとの、両方がいたのです。

おそらくそんなつきあいの中から、学校に行っていようといまいと、どうやら誰にとっても「学校」は大きな存在で、問題で。それにそもそも、「学校」っていったい何なんだろう、と考える機会が、彼にはとりわけ多かったようでした。

そこで、金沢でのシンポジウムは、学校に行てなかった子と学校に行ってる現役高校生、あわせて7人が、同じテーブルにつき、「学校って何？」をテーマに、パネルディスカッションでおおいに語りあおう、ということになりました。

なるほどねえ、確かに、不登校のシンポジウムというと、学校に行かなかった・行けなかった子が体験を話して、不登校の親たちや、不登校に関心のある先生とかおとなたちが聴きに来て、でも学校に行ってる子もその親も、そこにはめったに来ない、というのがこれまでのスタイル。

今回、若者たちがしかけようとしているこのシンポジウムは、その意味で、1998年時点では金沢にかつてなかった、新しい試みかもしれない。実行委員長のTくんのそういう着眼点が、私にはとても新鮮でした。

このシンポジウムの宣伝を兼ねて、Tくんと一緒に、二人で金沢市内のいろんな学校をまわりました。19歳の実行委員長が熱く語るシンポジウム計画を、行った先々の高校の先生たちは、思った以上に関心を示して聴いてくれたようでした。

また、学校に向かう車の中で、いつもTくんは私にいろいろと質問をし、私は私で思ったことを言い、また彼も感じたことを言い、その移動時間はまるで、車中二人紅茶のようでもありました。

若者たちのシンポジウム

当日は大きな会場に、何百人もの参加者。司会もパネラーもスタッフも、全員若者たち。弁護士さんや東京シューレ代表の方の対談に続いてはじ

まった、10代の7人によるパネルディスカッション。

テストは必要？からはじまって、「学校って何？」ってなに？／学校に行ってる・行てないで線を引くことについて／いい不登校と悪い不登校ってあるの？／義務教育について／自分らしく／人生の目的、などなど。

まったく予定調和的でないディスカッションがすごくおもしろかったし、会場の親からの質問に対しては、子どもが学校に行かないことで、不安なのは子どもよりもむしろ親なんじゃないか、ってニュアンスでパネラーが即、切り返すあたり、私も親の一人として、リアルにはっと気づかせられる場面がたくさんありました。

ディスカッション、とってもよかったよ、せっかくだから冊子にまとめたらいいいよ。そう言って、テープ起こしを申し出てくれるプロのおとながあらわれたことから、若者たちが編集してのなかなかユニークな冊子、『学校って何？～これが僕らの生きる道』も、ほどなく完成しました。

うちの本棚にあった、もう残り一冊となったその冊子を、今、10数年ぶりにめくってみたら、おしまいのページに、私はこんなふうに書いてます。

「自分たちでしたいことする時、元気はうちからわいてくるし、したくないことさせられたら元気なくなるのが（子どもだって、おとなだって）、はっきり見えた数ヶ月間でした。

石川・富山の若者たちが集まったの打ち合わせ会は、毎回、熱いパネルディスカッションそのもので、うん、こりゃ当日絶対おもしろいぞ！と確かに予感したけど、当日は予想をはるかに越えてました。どのパネラーも自分の言葉を持ってたこと、違う意見にもきちんと耳傾けていたこと、この当たり前が、ほんとはすごいことなんだと思いました。

火の玉になっていろんな人との出逢いに飛び込んで行った実行委員長も、舞台に乗った人も乗らなかった人も、『学校って何？』にかかわったすべての人の、これは“成長のものがたり”です。まぜてくれてありがとう、私自身、とっても楽し

かった。]

このシンポジウムが大好評で、また、それを記録した冊子も思いのほか広く読まれて、一時、Tくんはあちこちからお声がかかったり、講演会で話す機会など、かなりふえたようでした。

シンポジウムに参加した人や、彼の話をお聴いた人が紅茶にくることも結構あって、「不登校だったのに、Tくんってすごいねー」とか、「ああいう不登校ならいいわねえ」といった感想も時折、私の耳に聞こえてきます。

そのつど、私は、んん？ とひっかかりながら、ああ、こういうことか、学校に行ってる・行っていないの線引きのことや、いい不登校・わるい不登校という分け方やとらえ方など、ディスカッションで語りあわれたのって、まさにこういうことだったんだよなあ、と若い人たちが語ってた言葉の意味を、あらためてとらえ直すことが何度もありました。

不登校のヒーロー？

ちょうどそんな頃だったか、Tくんがふつうの紅茶の日に来て、だけど6時の、紅茶を閉める時刻になってもなかなか帰りにくそうにしている。いったん玄関に出て帰りかけ、それからまた思い直したみたい、「スウさん、聴いてもらいたいことがあるんだけど、まだいいですか」って言って、もう一度、家にあがったのでした。

どうやらその頃の彼は、まわりから、まるで不登校のヒーローみたいに見られてる感が強かったようで、そのことへの違和感が、どんどん増殖していたのだらうと思います。顔立ちがジャニーズ系のかっこよさもあいまって、よけい、そんなふうに見られてしまったのかもかもしれません。

その日、彼が私たち夫婦の前で少しずつ、ちょっとずつ、話してくれたのは、まずは、世間が勝手に抱くTくんに対するイメージと、彼が思うところの、自分自身の実像との、大きなギャップのことでした。

ほんとの自分はちっともすごくないし、いつもきれいなところにいるわけじゃないし、弱いところも、ずるいきもちも、いっぱい持っている。だけど、そうじゃない部分ばかりいつのまに強調されて、なんかすごい人みたいにかん違いされて、そうじゃないっていても、誰にも信じてもらえそうもなくて。

そうかあ、そんなふう感じてたんだ。それって確かに、しんどいし、キツイことだろうね、と思いつつ、そういうことを本当に苦しいと感じる彼の、まっすぐすぎるほどの正直さに、ちょっとびっくりもしたのでした。

荷物をおろすと

黙って聴き続けている私に、彼はそれから、自分がいかに弱虫だったか、ずるい人間だったか、それをまるで証明しなきゃなりません、みたいな真剣さで、子どもの時からのいろんな話、親とのこと、兄妹とのこと、ともだちとのこと、つかえつつかえ、汗をかきかき、顔を真っ赤にしながら（緊張すると、彼はすぐ赤くなるたちらしく）、必死に、なんと真夜中までかかって、語り続けたのでした。

全部語り終えて、ふう〜っと大きなため息をついた時、やっと、お茶でもいれようか、のど、乾いたでしょ、と言えたぐらいの、緊迫した空気の中に、私たちが居たこと、その時点で私もやっと気がつきました。

その瞬間に、彼の表情がいちどきにゆるんで、弛緩して、でれでれになって、とろけちゃいそうな顔になったこと、今でもはっきりと覚えています。全くジャニーズ系じゃなくなって、芯から解放された、のびやかな、なんとも子どもっぽい顔になっちゃった彼でした。

一人で抱えていた重たい荷物を、よいこらしょ！ って、おろし終えると、こんなふうからだごと変化しちゃうこともあるんだ、と、ここまではっきり私に見せてくれた人って、彼がはじめてじゃなかったかな、と思います。

スウさんにこんなこと話したら、なんだ、そん

な人だったのか、とがっかりされて、軽蔑されるんじゃないか、嫌われるんじゃないか、とこわかった。だけどスウさんには、嘘をついたままの自分でいたくなかったんです。

どうしても話さなくちゃならなかった、というその理由が、私の前で自分をごまかしたくなかったからなんだ、とわかった時、なんとまあ、不器用で、だけど誠実なんだろう！ と、おとなの私の方こそ、胸がきゅっとしめつけられる想いがしました。

彼が必死に話した内容の一つ一つよりも、あの緊迫した数時間を、私たち夫婦と一緒にわかつ持った、ということの方が、きっとずっと大きな意味があったんじゃないだろうか。あの時間は、Tくんにとっても私にとっても、その後の互いの関係性において、関所のような、越えなきゃいけない峠のような、大事な通過点だったんだな、と今でも思うのです。

不登校を誇りに

その後、Tくんは、東京で何年間か介助の仕事につき、やがてケアマネジャーの資格をとり、数年前に結婚して、今は関西で、自立生活センターの、介助者を取りまとめるコーディネーターとして働いています。

24時間の介助を必要とする人のかたわらにいて、時には言葉を持たない人に付き添い、寄り添い、身近の生活の手助けをする仕事。ある利用者さんから、介助の仕事は、君の天職だねえ、と言われたことが、彼には心底、うれしかったらしい。そして彼自身、今はそう思っているようです。

何より、不登校をしていた経験が、介助者としての彼の仕事に、現在とても活かされている気がする、と、ある時、とてもうれしそうに話してくれました。

学校に行っていない、というだけで、まわりの人から、時に見下され、軽蔑され、差別され、ともだちから理不尽なことを言われ、自尊心をぐちゃぐちゃにされたこと。ともだちの親からも、うちの子とはもう遊ばないで、あの子も行かなく

なると困るから、と言われたこと。

だけでも、自分がそういう経験をしてきたがゆえに、彼は、重い障がいのある利用者さんともにいる時、上から目線に立つことが、決してできない。そのことが、介助の仕事をするのに欠かせない大切なことの一つだと、彼はいつ頃からか、気づいたのだそうです。

あんなに苦しくてしんどかった、その渦中にはまったく“負”にしか思いようもなかった経験が、人生のどこかで、新しい意味を持って見事に反転する。そういうことが、生きている途中で、本当に起きるのですね。

支援センターにバイトではいつてくる学生たちには、自分の不登校をよく自慢しちゃってるんです、なんて話す彼、不登校を誇りにすら感じてる彼は、いかにも彼らしい、いい人生を生きてるんだなあ、って、しみじみ思ったことでした。

名づけ親

Tくんが紅茶に来だしてから、はや15年余り。

私たち夫婦のありようや、娘と私の親子関係、家族のかたち、そのどれもこれも、紅茶に来はじめの頃の彼にとっては、ものすごいカルチャーショックだったらしい。

夫婦の、どっちが上でも下でもない、どなったり、命令したりもしない、たいらな、認めあう関係性。彼の目には、まさに不思議に映った、親子間、夫婦間の会話や空気。私たちにしたら何気ない日常のすがたが、その後の彼の、家族観や夫婦観に、おおきな影響をおよぼしたみたいです。

不登校をしていた子どもの頃は、死ぬことばかり考えていたという彼。将来、仕事をしている自分も、結婚する自分も、かけらほども想像することができなかった、というTくんが、今は、互いにその生き方を応援したいと思えるパートナーと出逢い、その彼女とあたらしい家族をつくり、その上、父親にもなりました。

実は、パートナーが妊娠数ヶ月目の頃、Tくんからある日、とても真剣なお願いごとをされたの

です。生まれてくる赤ちゃんの、名づけ親になってほしいという、よもや思いもしないリクエスト。

そんな重大な役目を、まさかまさか。だって名前という大事なものは、あなたたち両親か、本物のおじいちゃんかおばあちゃんがつけるものだよ、といったんはおことわりしたものの、Tくんが、「僕らの人生にとってとても大切なひとに、子どもの名前をつけてほしいんです」と本気で言うこと、彼のパートナーも同じように思っていること、二人が二人とも、私たち一家の存在を、おおきな意味での家族だと思ってきてくれたこと……などを知った時、そうかあ、こういう家族のありようもまた、この若い夫婦が独自に進化させていった、新しい家族観なのかもしれないな、と思いました。

親が名前を考えると、どうしたってその子にいろんな期待をこめすぎるだろうし、その子をどこか、自分たちの所有物みたいに思ってしまうことがあるかもしれない。何より、生まれてくる子には、たくさんのひとの間に、いろんな人との関わりの中で、育てて行ってほしいと願ってるんです。

そう言われた時、とりわけ最後の、「ひとの間に」という言葉に、何かすとんと納得しました。そうだね、それが本来の「人間」、なのだものねえ。

というわけで、生まれて初めての、ゴッドマザー役を。

彼らの間に生まれてきてくれた女の子の名前は、良きことを想う——想良、と書いて、そら。

木+目と書く「相」の字は、生い茂った木を見ることで、木に象徴される自然から、ちからをもらう、という意味があるようで、その字に「心」がつくことでさらに、ひとを思いやる、という意味もくわわる。

そんな想いをこめ、どうか、良きことを想い、ひとを想い、しあわせなところで生きられる子でありますように、と願っての、想良ちゃん。

私たち一家を、おおきな家族とみなしてくれてるTくん夫婦。ちなみにうちの娘はすでに、想良ちゃんにとっての、血縁によらない“おばちゃん”なのだそうです。

想良ちゃんがいつか思春期をむかえて、両親に

反抗して、時には家出なんかしたくなった時に駆け込める、シェルターの家出先を、今からいくつか確保しておきたい、というTくんですが、まずは娘のところか、その家出先候補の第1号、なのですと。

通過点

誰かと出逢って、つきあいを続けていく中で、大切に思えるひとと私の間には、やっぱりいつも、見逃せない通過点があるんだなあ、とあらためて思います。

何をもって、その人を信じられるか。その人を大切な存在だと思えるか。どうやって、その通過ポイントを、ともに越えられるか。

Tくんの場合ならまさしく、あの深夜にまでおよんだ彼の等身大のカミングアウトだったと思うし、私のところに現在住んでくれている、他の誰かれを思い起こしてみても、やっぱり、その人その人、と私の間に、一つ一つ物語をはらんだ、通過点というものが、確かに存在しています。

出逢って何十年たとうと、最初の時から距離の変わらない人もいれば、ごくたまにしか逢えないけど、忘れられない出来事や事件といった重要な通過ポイントを共有して、いまだに強いつながりを感じられる人もいる。

その人が今生きている人であっても、この世にはもう居ない人であっても、ともにそのポイントを分けあって越えて来た人とは、この先もきつとずっとつながっていけるのだろうか……。そんなことを、この第10話を書き終えたたった今、ふっと感じました。

2012年11月25日